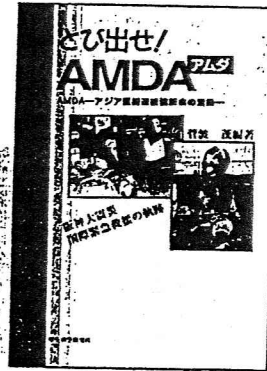


阪

神・淡路大震災の復興も半年を越えたのに、いまだに避難所の解消もままならず、仮設住宅では孤独死や自殺が後を絶たない。恒久住宅や雇用確保等これから先も不透明で人生再設計もできないで途方に暮れる



とび出せ! AMDA

菅波茂＝編著
厚生科学研究所＝発行
03(340)6070
四六判：269頁／1800円(税込)

書評する筆者も阪神・淡路大震災で活躍するAMDAの新聞記事にふれるまでは何も正確には知らなかった。AMDAの正式な名称は、アジア医師連絡協議会といい、アジアの医師たちを中心とする地域的な災害救援活動を行うNGO(非政府組織)である。本書は、AMDAが被災地長田区で行った救援活動のドキュメントであり、AMDAのこれまで国際的救援活動のフリーフィンギングである。

AMDAは、被災地神戸に最も早く救援に入った民間団体ではないだろうか。地震発生の一月十七日の午後には第一次医療チームを組織し、午後十一時には長田保健所に現地事務所を設置し、翌日には救援活動を開始している。そして長田区内の病院と診療所の外來再開が半分以上になった頃を見はからって、

二月十六日には一カ月に及ぶ全活動から撤回している。疾風のように現れて、疾風のように去っていくAMDA。救援活動の機動性といい、被災地である地元の自立性、自主性の尊重といい、救援者の被災者との関係の取り方は見事というほかはない。

菅波によると、AMDAの理念は「良き医療、良き将来」であり、具体的戦略(方法論)は、「相互理解、相互支援、相互幸せ」なのだそうである。その基本にあるのは、「相互扶助思想」とされている。第二部の「国際緊急救援の軌跡」を読めば、弱小NGOであるAM

DAがどのようにして国境を越えた緊急救援活動ができるようになったかが述べられている。国連に認知された国際NGOに劣らない活動を展開するには、被災地のローカルNGOもしくは現地医師と日常的に連携・協力関係を結んでいなければならない。リージョナルNGOとしてのAMDAが設立された経緯をみると、岡山大学のアジア医学研究からはじまり、アジア医学生との交流の積み重ねのなかから、アジア医師の連絡協議会に至っている。顔の見える国際交流のなから相互緊急支援の活動が必然的に生まれていたのである。

第一部の「阪神大震災救援の記録」は、菅波の概況説明とAMDAにボランティアとして関わった人々の眼に映った被災現場の状況と彼らの活動と思入れが語られている。AMDAといえは医師や看護婦だけのボランティア活動と思いきみがちだが、事実はそうでないことがよくわかる。およそ一カ月の震災救援活動に関わったボランティアは、延べで二九二一人、実人員で一〇八九人である。医師・看護婦は、それぞれ実人員では二八人の医師、一五一人の看護婦で、大半は運転手から救援物資の仕分けを担当した一般ボランティアである。緊急救援の三原則や被災発生後の時系列対応策等、防災や応災への組織的・計画的取り組みと機動性のあるAMDAの経験則は学ぶ値打ちがあるはずである。

評者

牧里毎治

まささと つねじ

大阪府立大学教授

人たちもいる。阪神・淡路大震災は被災者救援者それぞれのドラマにことかかない。

AMDA(アムダ)の阪神被災地区の救援活動も災害救助のあり方を考えさせるメッセージをもった活動である。正直に白状すると